

『史記』秦始皇本紀に記された
「巨魚」についての民族考古学的考察

平口哲夫¹

**AN ETHNO-ARCHAEOLOGICAL PERSPECTIVE ON
A "GIANT FISH" IN THE HISTORY
OF QIN DYNASTY
WRITTEN BY SIMA QIAN OF THE WESTERN HAN**

TETSUO HIRAGUCHI¹

ABSTRACT

A rock engraving at Ban-gu Dae gives evident proof of prehistoric whaling, which tradition, however, scarcely has continued in Korea. Two descriptions suggestively supply reasons for it: 1) the Japanese legend that Xu Fu introduced whaling into Japan at Kumano on the Kii Peninsula during the Qin dynasty, equivalent to the Early Yayoi period in Japan, which covers the estimated period of the whaling engraving at Ban-gu Dae, 2) a description in relation to Xu Fu about the year of the Qin Emperor Shi's death (210 B.C.) in the dynastical history of Shi Ji written by Sima Qian. The latter description was composed of three parts; firstly, Xu Fu used the pretext of a "giant shark" blocking the passage for his difficulty to get an elixir of life for the Emperor; secondly, hearing that the Emperor had dreamed of fighting with a sea-god, a diviner advised him to eliminate a "large fish" or a "shark dragon" signifying an unlucky omen; lastly, though the Emperor, going up north of Shantung Peninsula from Langxie to Lungcheng-shan, could not find a "large fish", he finally found a "giant fish" at Zhifu, and then killed it by shooting. The author himself does not regard the large or giant fish as a shark or a shark dragon. His description has a historically objective style. From the ethno-archaeological viewpoint, I gather that there was no whaling culture in the region at that time, though there is a high possibility that the "large fish" or "giant fish" was a cetacean.

¹ 金沢医科大学

〒920-0293 石川県河北郡内灘町大学1-1

Kanazawa Medical University, 1-1 Daigaku, Uchinada-machi, Kahoku-gun, Ishikawa 920-0293, Japan

韓国盤亀台鯨類画との出会い

石川県能都町真脇遺跡から出土した多量のイルカ骨の調査を担当して以来、先史補鯨に興味をもつようになった筆者は、真脇出土イルカの多くが春から初夏にかけての頃に西方から能登近海に回遊して来る種に属するということから、西日本や韓国南部の沿岸における鯨類・捕鯨の諸情報に注目するようになった。韓国盤亀台の岩刻画には陸獣類だけでなく、「イルカやクジラと見られるもの」も描かれていることが指摘されていた(國分, 1973)。そこで、真脇遺跡調査報告書の作成が一段落した1986年、岩刻画の報告書(黄・文, 1984)を入手し、動物考古学的な視点から検討しはじめた。この報告書に収録された岩刻画には、捕鯨の様子を描いたものがあるだけでなく、いくつかの種を区別して描いたと思われる特徴的な形状を示すものが含まれている。しかし、原報告書は、美術的な考察が中心をなし、鯨種の同定については検討が十分なされていない。1990年2月、第2回IBI国際研究集会で東アジアの鯨類考古学について発表したのをきっかけに、二、三の鯨類学者から有益な示唆を受けた筆者は、鯨類画の種同定に本腰で取り組むことになった(平口, 1991a)。その成果の一端は、同年5月に日本考古学協会と日本海セトロロジー研究グループという二つの学会でも発表した(平口, 1990, 1991b)。

それ以前、盤亀台鯨類画にセミクジラを描いたものがあるという指摘はなされているが(朴, 1987)、考古学者の多くは、クジラ(ヒゲクジラ類と大型ハクジラ類)よりもイルカ(小型ハククジラ類)のほうが主体をなしているかのような印象をもっていたようである。ところが詳細に検討してみると、ナガスクジラ類やセミクジラ、コククジラのほか、アカボウクジラ科の鯨類、マッコウクジラ、シャチ、ゴンドウクジラ類など大型ハクジラと思われるものもあることが明らかとなった。しかも、大方の予想に反して、小型ハクジラであると断定できるようなものはなかったのである。

盤亀台岩刻画の年代については諸説があるが、新石器時代から初期鉄器時代までのいずれかの時点で描かれたものであると考えてよいだろう。盤亀台の発見は、韓国においても先史時代に捕鯨が行われていたことを明らかにした。また、韓国の青銅器時代(無土器時代)は日本の縄文時代晩期(約1000~250 B.C.)頃に相当するから、日本でも縄文時代から弥生時代にかけての時期に大型鯨類の捕獲が行われたかもしれないという可能性を盤亀台は示唆している。

韓国では、盤亀台岩刻画が示すように先史時代に捕鯨が行われていたにもかかわらず、その伝統はほとんど後世に継承されずに終わり、近代になって日本の影響で捕鯨産業が再開されることになった。一方、日本の捕鯨は縄文時代以来、発展的に継承され、近世鯨組の成立で華を開き、さらに近代捕鯨へと転化していった。この日韓の違いは、畜産に向かない日本と畜産が古くから定着した韓国との自然的・文化的な差からくるのであろう。大陸の「畜産農民」(佐原, 1993)からうけた影響の度合が日韓では相当の違いがあり、そのことが捕鯨史にも反映しているといえよう。したがって、盤亀台鯨類画は、東アジアにおける民族・文化の形成・交流を考えるうえでも重要な存在として浮かび上がってくる。

徐福捕鯨伝説と『史記』秦始皇帝本紀の「巨魚」

そこで想起されるのが、盤亀台岩刻画の推定年代の範囲内にある秦の始皇帝の時代、すなわち日本の弥生時代前期に相当する時期に日本に渡来し、紀伊半島の熊野地方に捕鯨を伝えたという徐福捕鯨伝説である。この捕鯨伝説については、「産業事蹟考」を引用した解説がなされている(奥野, 1991; 佐賀市, 1994)。この捕鯨伝説に接したとき、徐福の母国に捕鯨文化の形跡がないことから、これは史実として成り立ちがたいのではないかというのが筆者の第一印象であった。しかし、盤亀台鯨類画が示すように韓国先史時代に捕鯨が行われていたとすると、中国においても古い時代に捕鯨が行われていたかもしれず、徐福捕鯨伝説をまったく荒唐無稽として退けるわけにもいかないのではないかと考え直すようになった。この問題を検討するには、徐福の郷里である斉の国、現在の山東省あたりの沿岸部で鯨類骨がどの程度出土しているか調べてみなければならない。また、史書にも何か手掛かりがないか再検討してみる必要がある。山東半島ならびにその付近の遺跡から鯨類骨がどの程度出土しているかについては後述することにして、まず、『史記』秦始皇帝本紀第六に掲載された始皇帝死去年(210 B.C.)における徐福関係紀事に出てくる「巨魚」の記述を検討してみよう。

「方士徐市等入海入求神薬、数歳不得。費多。恐譴、乃詐曰、蓬莱薬、可得。然常为大鯨魚所苦。故不得至。願請善射與俱。見則以連弩射之。始皇夢與海神戦、如人状。問占夢博士。曰、水神不可見。以大魚蛟龍為候。今上禱祠備謹。而有此悪神、當除去。而善神可致。乃令入海者齋捕巨魚具、而自以連弩候大魚出射之。自琅邪北至榮成山。弗見。至之罘、見巨魚。射殺一魚。」

「方士徐市等、海に入りて神薬を求め、数歳なれども得ず。費多し。譴められんことを恐れ、乃ち詐りて曰く、蓬莱の薬、得べし。然れども常に大鯨魚に苦しめらる。故に至ることを得ざりき。願わくは善く射るものを請ひて與に俱にせん。見はれなば、則ち連弩を以て之を射ん、と。始皇夢に海神と戦い、人の状の如し。占夢博士に問ふ。曰く、水神は見る可からず。大魚蛟龍を以て候となす。今、上、禱祠備はり謹めり。而るに此の悪神有り、當に除き去るべし。而して善神、致す可し、と。乃ち海に入る者をして巨魚を捕らふる具を齋さしめ、而して自ら連弩を以て大魚の出づるを候ひ之を射んとす。琅邪より北のかた榮成山に至る。見えず。之罘に至りて、巨魚を見る。射て一魚を殺す。」(吉田, 1973)

この箇所は、1) 徐福が、「大鯨魚」に行く手を妨げられて神薬をなかなか入手できない、との偽りの奏上をしたこと、2) 海神と戦う夢を見たという始皇帝の話聞いて、占夢博士が不吉な兆候「大魚・蛟龍」の除去を始皇帝に進言したこと、3) 山東半島の琅邪から北上して榮成山まで至ったが「大魚」を発見できず、ようやく之罘に至って「巨魚」を発見、射殺した(Fig. 1)という三つの部分から構成されている。この大魚ないし巨魚について、注釈ではサメとしているが、司馬遷自身はこれを「鯨魚」とも「蛟龍」ともみなしているわけではない。なぜなら、1) に記された「大鯨魚」(大ザメ)は、あくまでも徐福の言い分に使われているのであり、2) に記された「蛟龍」(ミズチという想像上の動物、他本に「鯨魚」としたものがある)も占夢博士の夢判断であって、現実に存在したわけではないからである。始皇帝一行が捕殺したのはあくまでも「巨魚」であり、それが実際にいかなる動物であるかに

『史記』秦始皇本紀第六

大魚出射之。自琅邪北至榮成山。
弗見。至之罘、見巨魚。射殺一魚。

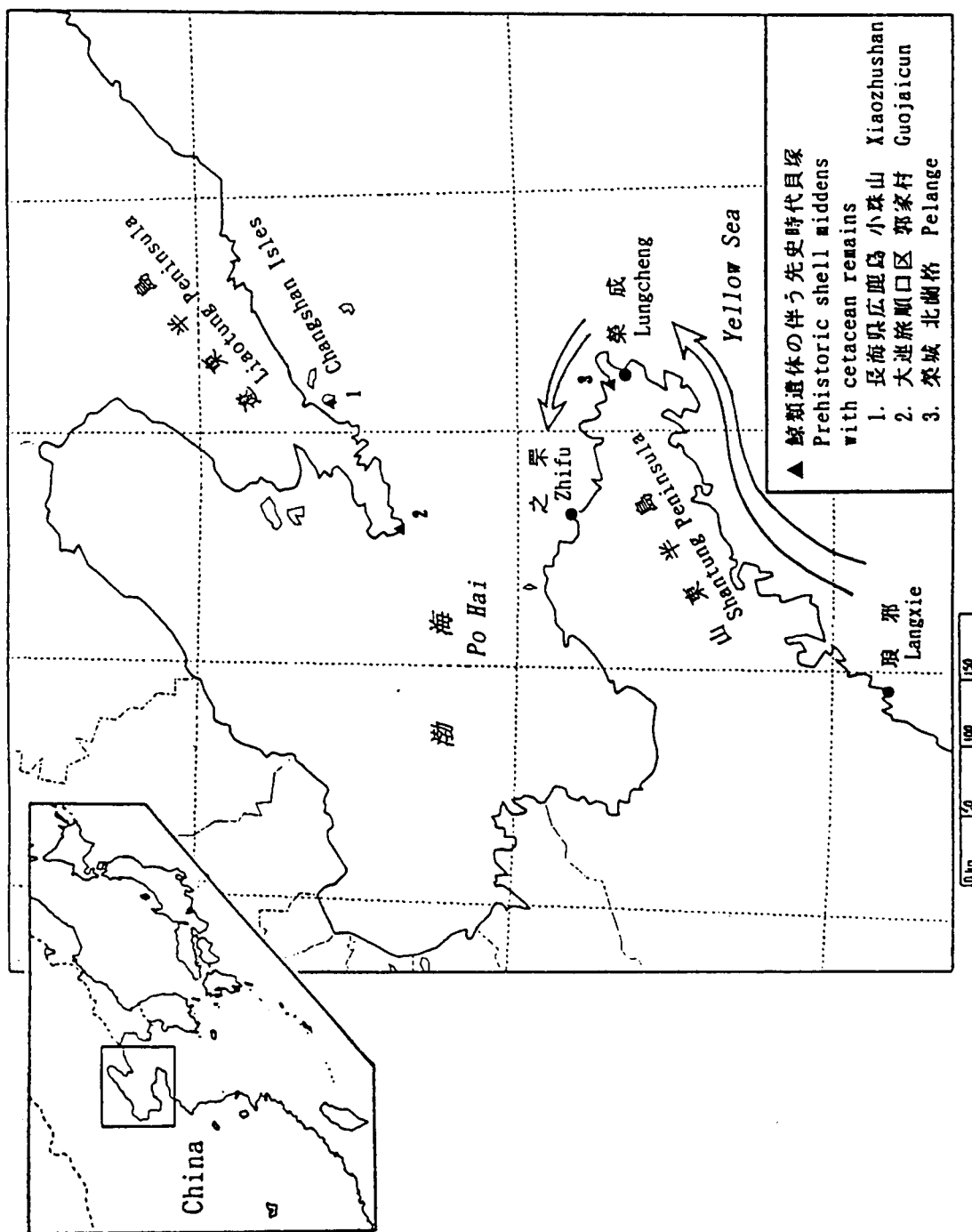


Fig. 1. The course of "giant fish" hunting by the Qin Emperor Shi, and prehistoric shell middens with cetacean remains in Liaotung Peninsula, Changshan Isles and Shangtung Peninsula.

については、司馬遷は慎重にも判断を避けている。このような客観的な記述様式が『史記』の評価を高めているのである。

サメ漁は中国でも古くから行われており、先史時代貝塚からサメの骨や歯が出土することは珍しくない。『史記』の著者司馬遷の時代(前漢)はもとより、その前代に当る秦の時代においても、サメの存在は中国社会でよく知られていたと言ってよい。したがって、始皇帝一行がしとめた大魚がサメだとしたら、「鮫」とためらいなく記したはずである。ところが「大魚」とか「巨魚」としか記さなかったということは、サメではなく、当時の中国人にとって正体がよく分かっていない「大魚」、すなわち鯨類であった可能性が高い。クジラを意味する鯨鯢という字について辞典(諸橋, 1986)が掲げる最古の事例は、『春秋左氏伝』の宣公12年(596 B.C.)の条に記された「其の鯨鯢を取りて之を封じ、以て大戮と為す」(鎌田, 1974)である。この書は、孔子が魯国の記録を添削して制作したという『春秋』の注釈書であるが、先秦旧来のものなのか、前漢末期の偽作なのかという真偽論争が清朝末期から続いている。いずれにせよ、鯨鯢を悪の首領にたとえている点に、大魚を悪神の化身とみなして殺したという秦始皇帝本紀の記述に相通じた鯨類観をうかがうことができる。なお、後漢に編まれた中国最古の部首別辞書『説文解字』は、鯨の正篆として鯨をあげ、「海の大魚なり」としている。秦始皇帝本紀第六に記された「大魚」ないし「巨魚」が鯨類である可能性は高いけれども、当時、山東半島沿岸で積極的に捕鯨が行われていたとは言いがたい。

東アジア沿岸の鯨類遺跡と徐福捕鯨伝説

東アジア諸地域の鯨類遺跡率(鯨類遺体出土遺跡数 \times 100/動物遺体出土遺跡数)を調べたところ、真脇遺跡を擁する石川県が最高の40%(10/25)、盤亀台のある韓国慶尚南道の鯨類遺跡率18.4%(7/38 貝塚)は、石川県には遠く及ばないが、貝塚密集地として知られる千葉県5.6%(31/551 貝塚)や宮城県7.7%(25/325 貝塚)をかなり上回り、長崎県の21.5%(14/65)に迫る。朝鮮半島の西に連なる中国の遼東半島・長山群島は、千葉県・宮城県並みの6.1%(2/33 貝塚, Fig. 1)を示すが、鯨類骨の出土量は微々たるものである。渤海湾・黄海を挟んで遼東半島と対峙する山東半島は4.8%(1/21 貝塚, Fig. 1)、南中国・東南アジア沿岸部は0.1%(2/256 貝塚)にすぎない(平口, 1997)。各遺跡ごとの鯨類骨の出土量をみても、中国・東南アジアではわずかに出土しているにすぎない。今後の調査によって、各地域の鯨類遺跡率に変化が生じたとしても、全体的な傾向はあまり変わらないだろう。中国では、先史時代においても捕鯨文化の形跡はないようだ。徐福の故郷とみなされている徐福村(江蘇省連雲港市 贛榆県)では、2000年以上前の巨大な鯨骨製の錨が発見されており、近村からも同時期の鯨骨が多量に出土していると言われているが(三谷, 1992)、考古学的な検証をへての話なのかどうか、筆者はまだ確認していない。

ところで、西北九州から西南九州にかけての地域では、縄文時代中期後半～後期前半の阿高式系土器の底面に大型鯨類椎骨の椎端板圧痕がついた例が分布している。この特異な土器は、鯨底土器と呼ばれ、60カ所以上の遺跡で発見されている(金田, 1998)。鯨底土器それ自体は捕鯨の証拠とはならないが、時期的・地域的な偏りが何を意味するのか興味深い。

西北九州では、古墳石室や横穴墓の内壁に捕鯨図またはその可能性のある図を刻んだ例も発見されている。その彫刻が古墳や横穴墓の築造当時のものであるという確証はないにしても、古代に描かれたものである可能性は高く、それ以前の捕鯨を考えるうえでの参考にもなる。

南は鹿児島県から北は青森県まで日本各地に分布する徐福伝説地のなかで、近世に捕鯨が行われていたのは紀州熊野、肥前佐賀、丹後伊根町の3地域である。徐福が日本に捕鯨を伝えたのならば、佐賀などにもそのような伝説が残されていてよいはずであるが、徐福が捕鯨を伝えたという話は熊野地方に限られている。民族考古学的に徐福捕鯨伝説が成り立つためには、徐福は中国の捕鯨技術を熊野に伝えたのではなく、旅の途中で知った捕鯨技術を熊野に伝えたと考えるほかない。たとえば、「徐福が韓国南部～九州北西部沿岸地域のどこかで知り得た捕鯨技術を紀州熊野に伝えた」という仮説を立てて検証してみる必要がある。もちろん、徐福のことを待ち出さなくても熊野の捕鯨起源を追求することはできるだろう。にもかかわらず、あえて徐福捕鯨伝説を本論で取り上げたのは、始皇帝の時期の話であり、紀元前3世紀という年代的視点をもって捕鯨問題を考えることに意義を見出すからである。

本論は、第9回国際海洋生物研究所研究集会の発表原稿に手を加えたものである。本来 IBI Reports No.8に掲載するはずであったが、筆者の怠慢により延び延びになってしまった。関係者に深くお詫び申し上げるとともに、同研究集会での発表を通算7回もお許しくださり、また何かとお世話くださった同研究所の鳥羽山照夫所長をはじめとする所員の皆様に厚く御礼申し上げます。

引用文献

- 平口哲夫. 1990. 先史日本海域における鯨類捕獲活動—韓国盤亀台岩壁彫刻の鯨類面を中心に—. 日本考古学協会第56回総会研究発表要旨. p.32-35.
- 平口哲夫. 1991a. 東アジアにおける鯨類の考古学的研究. IBI REPORTS 2:79-87.
- 平口哲夫. 1991b. 朝鮮対馬海峡沿岸の古代捕鯨. 日本海セトロロジー研究 創刊号:20-29.
- 平口哲夫. 1997. 鯨観の多様性に関する民族考古学的研究. IBI REPORTS 7:147-155.
- 黄壽永・文明大. 1984. 盤亀台. 東國大学校出版部, ソウル. 235pp.
- 鎌田正. 1974. 新釈漢文体系31: 春秋左氏伝2. 明治書院, 東京. 893pp.
- 金田一精. 1998. 鯨骨の圧痕が残る縄文土器. 日本海セトロロジー研究グループ第9回研究会発表要旨集. p.27.
- 國分直一. 1973. 韓国考古小記. 古代文化 25:193-200.
- 三谷美沙夫. 1992. 徐福伝説の謎. 三一書房, 東京. 261pp.
- 諸橋轍次. 1986. 大漢和辞典巻12, 修訂版. 大修館書店, 東京. 1162pp.
- 奥野利雄. 1991. ロマンの人・徐福. 学研奥野図書, 新宮. 158pp.
- 朴九秉. 1987. 韓半島沿海捕鯨史. 太和出版社, 釜山. 562pp.
- 佐賀市. 1994. 太古のロマン徐福伝説. 佐賀. 149pp.
- 佐原眞. 1993. 騎馬民族は来なかった. 日本放送出版協会, 東京. 231pp.
- 吉田賢抗. 1973. 新釈漢文大系 38: 史記1 (本紀). 明治書院, 東京. 420pp.